反骨の漢、ミリキタニのサムライ魂を見よ！

文：わたなべりんたろう

結論を先に書くと**必見の傑作**だ。去年の東京国際映画祭で上映されたときにも、大きな話題になっていたドキュメンタリーである。

ドキュメンタリーの編集などを手掛けているリンダ・ハッテンドーフが、いつも通りかかるニューヨークのソーホーの路地には、高齢のホームレスがいた。男は、**いつも猫の絵を描いていた**。気になったリンダが話しかけているうちに、やがて交流が生まれる。やがて、9.11の世界貿易ビル崩壊が起こり、街中に有害な煙が立ち込めるようになり、リンダはミリキタニと名乗るその80歳のホームレスを気遣って、自分のアパートに住まわせる。そして共同生活を営むうちに、彼の数奇な運命が明らかになっていった……。

アメリカに東洋絵画の精神を伝えようとしていた気鋭の画家、ジミー・ツトム・ミリキタニ（“三カ谷”と書く）は、1920年にカリフォルニアのサクラメントで生まれたため、アメリカと日本の二重国籍を持っていた。一度は広島にもどって少年時代を過ごすのだが、芸術家肌のミリキタニは軍国主義が台頭する日本に嫌気がさして、1938年にアメリカに再度渡る。

だが、アメリカは第二次世界大戦が始まると敵性外国人の強制隔離を開始し、**12万人を超える日系人を収容所に送った**のだ。アメリカの国籍を持っていたミリキタニは、カリフォルニア州北端のツールレイク収容所に送られた。ミリキタニはこれを不当とし、市民権を放棄したのだが（同じく抵抗の証しとして市民権を放棄した日系人は数千人いたらしい）、このために**終戦後数年も自由がなく奴隷のように働かせられた**。

そのことをミリキタニはいまでも怒っている。家族も含めて親類の多くを故郷の広島に落とされた**原爆で失っている**のだが、この反骨の人生がすごい。ホームレスの身分にもかかわらず「なにかいるか？」と聞かれても、とにかく他人の施しは受けない。たまに「色鉛筆がほしい」と言うぐらいだ。**9.11の当日、崩壊するビルから逃げまどうアメリカ人たちを尻目に、いつも通りに悠然と路上で絵を描く姿**は、まさに漢！ しかも心優しい男でもあり、リンダ監督が仕事で予定の帰宅時間よりも遅く帰ってくると、寝ないで待ち、「独身女が夜中の12時になっても帰らないとはなにごとだ！」と声を震わせて涙目で心配するのだ。ぜひとも「男の墓場プロダクション」に入ってほしい逸材である。

ミリキタニがいつも色鉛筆で描いている絵は、タイトルにもあるように猫などをモチーフにした一見稚拙とも思える作品なので、街中で見かけた絵画を「**あんなのは商業アートだ**」と斬り捨てるシーンでは笑ってしまうかもしれない。だが、絵筆を持たせると、じつに見事な墨絵を書くのだ！ そのうえ、現代美術の巨匠であるジャクソン・ポロックに寿司やてんぷらを作って振る舞い、一時期は金持ちのお抱え料理人として生計を立てていたそうなので、料理の腕前も絶品なのである。その他、突然に演歌を歌い出したり、三船敏郎が演じた『宮本武蔵』をビデオ屋に買いに行くときに、**突如として最近の日本映画を全否定しはじめる**など、底知れぬ謎に満ちた人物像が明らかになってくる過程が興味深い。

それにしても、撮影当時で81歳なのにミリキタニがとても元気なのは驚異的だ。最初のシーンでは、花屋の計らいで閉店後に表に張り出したビニールシートの内側のスペースで、普段は寝泊まりしているのがわかる。手袋をしながら絵を描いているのだが、**おそらく気温は零下**であろう。この“リアル『失踪日記』”ともいうべき暮らしを、この男はすでに20年も続けているのだ！

これだけ不安定な生活を異国で続けていたら、おそらく自暴自棄になって野垂れ死にしてもおかしくないのだが、そうもならずに母国語である日本語や日本での記憶は鮮明である。アメリカの過去の仕打ちや戦争に対する怒りがエネルギーになり、ミリキタニを生かし続けているようなところがあるのだ。言うこともじつにしっかりしていて、9.11で引き起こされたイラク戦争やアメリカへの批判は鋭さに満ち満ちている。「**またアメリカは同じことをやっている。テレビなんか見なくてもわかる**」と語る言葉の裏には、「いまも第二次世界大戦と同じ戦時中なんだ。昔からなにも変わっていない」という、この男の苦渋に満ちた思いが改めて実感できるだろう。

ミリキタニに安定した生活を送ってもらおうと、リンダ監督は彼を連れて市の福祉事務所にかけあってみるが、「オレは市民権を捨てたから、そんなものはいらない！」とかたくなに拒否する。漢の誇りと矜持が表れたシーンだが、実際は1959年に市民権が回復されていたにもかかわらず、放浪生活をしていたミリキタニ本人にはその知らせが伝わらなかったという皮肉がある。

結果的にミリキタニはNY市が斡旋したケア付き老人ホームへの入居が認められるのだが、「芸は身を助ける」「人生つらくても生きていればいいことがある」という教訓を実感できる。**漢なら、なにかに打ち込んで人生を貫き通すことが大事**だということだ。

リンダ監督との共同生活で印象的なシーンがある。うどんをリンダ監督に作らせておきながら、「ツユがぬるい！」と文句を言うと、リンダが「（飼い猫も含めて）あなたたちには困っちゃうわね。わたしにもわたしの時間が必要なの」と言うのである。大変で世話が焼けると思いながらも、根底に確かな信頼関係があるのが感じられる見事なシーンである。

以上、ひとりの男が歴史に翻弄された長大な人生と、新たな人々との出会いを経て心境が変化していく過程を、**たったの74分**で描ききった監督の手腕がじつに見事だ。各エピソードを情緒過多にせず、寸止めで編集するのだ。日本のテレビメディアだったら、絶対にクライマックスに使うであろう感動的なエピソードをエンドクレジットにさりげなくインサートしていることにも、その点は顕著である。

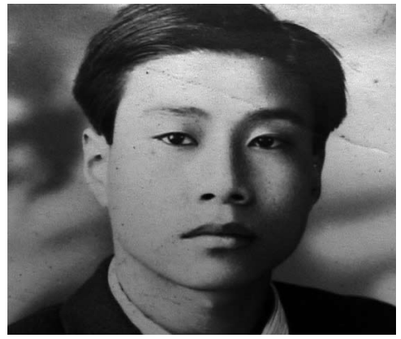
戦争が終わっても、それを経験した人間の中では戦争はまだ続いている。そういう意味では、映画のトーンは全く違うとはいえ、『ゆきゆきて神軍』と同じテーマなのである。戦争の愚かさを伝える稀有な作品なので、ぜひ観てほしい。

ミリキタニの猫 The Cats of Mirikitani

ホームレス画家の壮絶人生を追うドキュメンタリー版『失踪日記』！

ニューヨークの路上でひたすら猫の絵を描き続ける老人のホームレス。興味を持った女性がなにげにビデオカメラを手に男の日常を追うが、そこから浮き彫りになったのは、戦争によって運命を変えられた男の数奇な人生だった――。面白いのは『シッコ』だけじゃない！ 世界中で激賞の傑作ドキュメンタリー、ついに解禁！

国境を越えて生き抜いた ジミー・ミリキタニ、謎に満ちた80年！



1920年 にカリフォルニア州サクラメントに生まれ、広島で育つ。18歳で「日本のアートを海外に知らしめる」との立派な理念を抱き、シアトル在住の姉を頼って渡米。しかし折悪く日米開戦となり、強制収容所に送られ姉とは離ればなれに。（日系人強制収容所の実態は『愛と哀しみの旅路』『ピアラヤ杉に降る雪』などで語られている）

反骨心 の強いミリキタニは、米政府への忠誠度テストで「敵性」と見なされ、カリフォルニアのド田舎の施設に隔離される。18000人が収容されたキャンプでは数多くの同胞が命を落とし、さらに故郷の広島では原爆が投下、兄弟や同級生たちの大半を失った。その後、終戦したにもかかわらずニュージャージーの農場で強制労働に従事させられる。

1947年 8月に解放されたが、収容者たちの多くは米政府への抵抗の証として米国市民権を放棄した。市民権がないということは不法労働者と同様の扱いであり、ミリキタニは芸術活動を再開しようとニューヨークに流れ着く。しかし強制収容所での辛い経験は彼の画風を根本的に変えてしまう……。

アートだけ で食えるわけもなく、料理人としての修業を積み、それから米国内のリゾート地やサマーキャンプで腕を振るう。やがて金持ちに拾われて住み込みの料理人となるが、雇い主の死去とともにホームレスに転落。以降、生活のために絵を売りながら公園で暮らすようになり、本作の監督リンダと出会ったのは、それから10数年も先だった。

『ミリキタニの猫』

06米／監：リンダ・ハッテンドーフ／出：ジミー・ツトム・ミリキタニほか／74分／パンドラ配給／9月8日、ユーロスペースほかにて全国順次ロードショー

©lucid dreaming inc.